

# アマチュア育種の楽しみ あるいは苦しみ

落合 けいこ  
(ぬいぐるみ作家・やまね工房<sup>1)</sup>)

植物の育種というと、一般には種苗会社の研究所や公立の農業試験場などで専門のスタッフが行うものと思われているのではないだろうか。「品種改良」と言えばわかりやすいだろう。農産物であれば、より栽培しやすく収獲量が多いなど、営利栽培に都合のよいさまざまな品種や原種を集めて交配し、それを育てて理想に近いものを選択していく。最近ではバイオの技術を生かして、これまでなかったような花色や、特定の物質に耐性をもつ植物を作ることでもある。

しかし、交配してタネを採り、好みの花色や性質をもったものに近づけていく程度のことなら、その気になれば誰にでもできる。わたしがそれに手を染めたのは、いまから三十数年前の、まだ学生のころ。草花であろうと、花木や果樹であろうと、とにかくタネをまいて育てることに興味があった。市販のイチゴやキウイフルーツ(あのころは国産品はなく、輸入物だった)もタネから育て、収穫してみると、これがなかなかの上出来だった。もっともキウイは大きな実がならず、あとから市販苗を接ぎ木したののだが、果樹であってもタネから育てられることに、ある種の満足感を味わった。イチゴもとても甘くて早生の、いいものができたと記憶している。当時は、イチゴの苗は「宝交早生」という品種くらいしか市販されていなかったのも、自分としては画期的な発見だった。しかし、美味しい実はコジュケイが毎日やってきてほと

---

1 「やまね工房」のホームページ:「<http://yamanekobo.com>」。このHP内のブログで庭仕事関係のことをあれこれ書いています。パンジー、ビオラについて、いずれは独立したカテゴリーを作りたいと思っています。

んど食べられてしまい、きちんと苗作りをしなかったのがいつの間にか庭から姿を消してしまった。

## 平尾秀一氏との出会いと育種の手習い

それはたんに、なんでもタネを播いて育てるということではなかったのだが、やがて球根植物までもタネから育てることに熱中しはじめた。そして当時の愛読書『ガーデンライフ』誌の種子配布記事をきっかけに、故・平尾秀一氏の薫陶を受ける機会がやってきて、その後30年以上も趣味の育種を続けることになった。

最初に取り組んだのはダフォディル。いわゆるラッパズイセンや、数種の原因種を含むスイセン類だった。当時、国内で流通していたラッパズイセンの品種は、キングアルフレッド、マウントフッド、セイロンなど古い品種が主体で、目を引かれるものはあまりなかった。しかし、『ガーデンライフ』で平尾氏が紹介されていた海外の品種のなかには、見たこともないようなピンクのカップを持つものや、形の整った純白のラッパズイセンなどがあった。そして、育種の歴史が浅いのでまだまだ新品種のできる可能性があることや、育て方の詳細などを、平尾氏から直接ご教示いただくことになった。振り返ってみるなら、これは二度とないような幸運だったと思う。氏はそのころ水産庁に勤めながら、検疫も厳しく情報も少ない時代に、数多くの植物を海外から日本に導入されていた。また、それを営利栽培家やわたしのようなただの植物好きにまで、惜しみなく分けあたえてくれた。

ところが、平尾氏は退官されてまもなく、これから植物に専念できるというときに、思いも寄らぬ急な病で鬼籍に入られてしまった。だが、氏ゆかりの植物たちや氏の足跡は、いまでも日本の園芸界に生き続けている。そう、育種された植物たちは、世に出て認められたなら世代を繰り返していき、そして作者がこの世を去った後も残り続けていく可能性がある！

さて、スイセンの育種だが、わたしは育種についての専門的な知識はなかったもので、ほとんど手探りの状態で、とにかく手持ちの品種を交配し(スイセンの交配は非常に簡単だった)、そしてタネを採り、それを播いては育ててみた。ラッパズイセンや大盃スイセンなど大型スイセン類は、タネから育て

ると開花までに5～6年はかかる。なかには生長の遅い個体もあって、一度に全部は咲かないし、咲いたと思っても翌年には球根が消滅していたりする。それでも、球根植物をタネから育てること自体がそう簡単だとは思っていなかったの、最初の花が咲いたときにはほんとうに、踊り出したいほどうれしかった。

だが、育種にはやはりそれなりの時間がかかる。結果を見ながら2世代を繰り返すのに10年以上もかかってしまうと、交配データもあやふやになってしまい、結果の積み重ねもなかなかうまくゆかない。しかも海外の新しい品種はとても高価だし、あのころは輸入も困難だったため、手持ちの品種では交配の組み合わせにも限界があって、なかなかこれといった結果がだせなかった。また交配データもラベリングのみだったため、長い栽培期間中に行方不明になってしまったり、地上部が枯れているあいだにうっかり移動してしまったりして、ずぼらなわたしにはとうてい管理不可能だった。そんなわけで、スイセンの育種は細々と続けてはいるものの、品種として確立できたものは、じつはまだひとつもない。

それでも、そこはアマチュア。球根植物でも開花がもっと早いものもあるし、ヘレボルスや宿根草の育種も品種として世に出す目的があるわけでなければ、データ管理なしで気軽に楽しむことができる。ときには、咲いた花を眺めながらの思いつきの「きまぐれ交配」や、あるいはこぼれダネでも、なかなか素敵なオリジナルができることがある。しかも自宅の庭でタネから半ば放任のまま育った彼らは、めったに枯れることもなく長命で、毎年、季節が来れば花を咲かせてくれる。

スイセンの育種をはじめたばかりのころ、ありふれたマウントフッドやセイロンを交配に使っていたわたしに、平尾氏が「励みになるように」と海外の新品種を交配した2～3年も



濃色の良個体・ピンクカップスイセン



実生のスイセン

のの苗をくださったことがあった。その球根の一部は30年近くたったいまも花を咲かせているし、それを交配した子孫が海外の新品種にも負けないわたし好みの花を咲かせることもある。そういえば平尾氏の教えのなかに、日本で育種することの大切さは、日本人の好みにあった美しさもさることながら、日本の気候に合って病気に強く丈夫であることが何より、というのがあった。ただし、丈夫で繁殖力が強すぎるといつのまにか庭から逃げ出して、脅威の帰化植物(!)になってしまう。平尾氏の教えのなかに、「理想の園芸植物とは、まめに手を掛けないと増殖しなかったり、生育に時間がかかるもの、栽培にちょっとしたコツが必要なものである」というのもあったような気がする——昨今、海外からの植物の導入は以前よりずっと簡単になり、あれから30年を経てようやく、園芸家として心しなければならぬ大事な教えだったと実感している。

さて、そんな趣味の育種に転機が訪れたのは、10年ほど前の、これまたとても面倒臭いようなアマチュア育種家、川越路可氏との出会いからだった。この出会いもまた、平尾氏ゆかりの園芸愛好家たちが発行している「園芸ニュースレター」を通じてであった。

### 川越路可氏との出会いとパンジー・ビオラの育種

川越氏は当時、九州の授産施設で鉢花の栽培をされていて、市場での競争力を高めるためにパンジーやビオラのオリジナル品種を作ろうと考えられたらしい。そこで、市販品種や手に入る原種を片っ端から集めて、いわば「総当たり的に」交配したという。その結果、じつにさまざまなタイプのパンジー、ビオラたちが出現した。ところが、志半ばで転勤となり、たくさんのいわば「育種途上種子」が多くの方々に分散配布されることになったのである。またそれまでの育成品種の写真とデータをまとめた「花図鑑」を製作されたのだが、わたしはそれを見て、パンジー、ビオラの花色・花形がこんなにもバリエーションに富み、魅力的なものかと、目からウロコが落ちる思いだった。それから十年、わたしの育種対象植物はいつしかパンジー、ビオラ中心となっていた。

当時、わたしはパンジーの交配方法も知らず（スイセンとはかなり違うの

だった)、誌上でパンジー育種の大先輩である早野雪枝氏に、図解で教えていただいた。

ラッパ水仙の花色は主に白と黄色であり、カップの色にはピンクや赤などもあるが、花の色としてはかなり幅が狭い。それに比べてパンジー、ビオラは格段に色幅がある。現存するパンジー、ビオラは数種の実種から作ら



八重咲きの新花

れたものらしいが、まだ使われていない実種を交配することによって、これまでとはちがう花型のものを作り出せる可能性もある。花色の組み合わせも、単色、バイカラー、ブロッチや中央の色が抜けてフェイスになるもの、覆輪や絞りなどいろいろで、花のサイズもじつにさまざまある。それこそ、ありとあらゆる組み合わせが考えられる。しかも、交配結果は、その年の秋には出る！ わたしの性格にぴったりだった。

幸か不幸か、このバリエーションの豊かさ、回転の速さのため、データ管理とラベル管理は必須となった。近年は、デジカメやパソコンといった便利なものもある。記録の管理に追われているようなところもあるが、おかげで育種のこつみたいなのが、少しずつつかめてきたような気がする。やはり、何年かかかって記憶がおぼろげになる前に結果が出ることが、次につながる原動力になるようだ。

何年か繰り返すうちに、花色や花形にも次代に出やすい優性の形質があることがある程度はわかるようになり、出やすい順位のようなものもわかってきた。そうすると、好みの花色や花型のものを作るために親株を選定するおまかな基準のようなものができてくる。また、開花時期や全体の草姿なども遺伝することがわかってくる。プロポーションもカラーも、自分好みのものを選んでゆくことで、オリジナルの品種ができあがってきた。

そうこうしているとき、思わぬ話が飛び込んできた。なんと「浜名湖花博」(2004年)への出品である。「園芸ニュースレター」を通じてときどきタネの配布などをしていたので、そこから調べられたのだと思うが、委託業務をしている会社から連絡があって、栽培はこちらでするのでタネを提供してほしいとのことだった。まだ固定が十分ではないことなどを説明し、アマチュアな



のどと遠慮したのだが、どうしてもと言われ、わけもわからずタネを送らせてもらった。

忘れたころに、タネを送ったわたしのビオラたちが無事育ち、看板付きで展示されるという連絡が入った。そして「関係者」ということで事前招待をいただき、いそいそと見に行ったのだった。その年は気温が高すぎて、パンジー、ビオラはすでに満開。そのため、存念ながらあまり長持ちしなかったようだ。わたしのビオラたちが、種苗会社の品種や、今話題の見元さんの品種(やはり出自は川越さんのタネ)と同じ並びで展示されていて、われながら「スゴイっ!」と思ったことを記憶している。これはきっと「親ばか」の一種なのだろう。

### 「花自慢」——わたしの子どもたち

パンジー、ビオラの育種にあたって、元になったのは川越氏育成のいくつかの品種と、いっしょに分けていただいた英国、コーソン氏の宿根系ビオラなど。それに、当時市販されていた好みの品種(ほとんどがF1だが素材としては使用可能)を、花色重視で加えてみた。はじめは川越カラーの延長線上から出られなかったが、5年経過くらいからオリジナルカラーが、すなわちわたしらしさが出てきたような気がする。

川越氏の品種管理の方法は、出現した新しい花にすぐさまふさわしい(?)命名をし、そのイメージを記憶して、より名前にふさわしい花にしていくらしい。なので、直接的な色合いなどのネーミングもあるが、なかなか詩的な夢のある名前も多い。ところがわたしの場合、どうにもこはずかしくてそのようなネーミングができない。そこで、できた年度



紺がすり



ラベンダーレース



ミニマンゴー

からはじまる番号管理で、まったく色気も夢もない「09XX番△色」みたいな呼び方になっていた。しかし、世に出す花にそれではあんまりなので「さくらカーペット」、「ラベンダーレース」、「ミニマンゴー」、「湘南ブリーズ」、「紺がすり」などなど、かなり直接的命名が多いのだが、いくつか名前のついたものもある。

そんなこんなででき上がった新しい品種たち。それを世に出してくれる奇々なひとたちがいて、ここ数年、数種がデビューを果たした<sup>2</sup>。

最初に世に出たのが「さくらカーペット」。いくらか上昇が長く、ひらひらしてうさぎの耳のような、淡いピンクと白の花が、低く広がった株の上にたくさん咲くものだ。今までのビオラにはあまりないタイプの花で、これのデビューは里帰りした川越氏経由によるものだった。最初のうちは新しい品種を作るこ

と自体が楽しかっただけで、じつはそれを世に出すつもりも、そんなことができるともまったく考えていなかった。かつて花屋の仕事を10年近くしていたので、市場のことや流通の知識も少しはあったのだが、意識してそれを目指したわけではなかった。ところが、友人・知人たちへの「花自慢」が、いつのまにか「園芸社交界へのデビュー」へとつながったのだった。

そしていま、市場にあふれるいろいろな品種の花たちのなか、大量生産でなくとも大手種苗会社の製品とは違う個性的な品種、また開花期が春になり苗販売の市場性が低くても、素敵な品種がたくさんあることを、なんとか



湘南ブリーズ・RHSカラーチャート



ブラックパロット

2 これらのビオラたちの入手方法は、年によって扱ってくれる会社がちがったりするので、はっきりしたことはいえません。「やまね工房」ホームページで紹介する予定ですので、上記のアドレスでのぞいてみてください。また「落合けいこ」+「ビオラ」といった感じで検索していただくのも、ひとつの方法かと思います。

してたくさんのひとたちに紹介したいと考えは始めている。

### アマチュアの育種、種苗会社の育種

好みのものができたとして、翌年も同じ形質を保つためには、さらに数代は、より近いものを選んで世代を繰り返す必要がある。そのとき、同じ花の花粉を使った自家受粉(セルフ)でタネを採ると、次代に同じ表現が出てくる確率は高くなるが、(品種にもよるが)種としての堅牢度はいちじるしく落ちてしまう。そのようなわけで、草勢やプロポーションを維持しつつ好みの花色、花型のものを維持するのには、やはりある種の技術が必要となる。

わたしのパンジー、ピオラ育種はまだ10年そこそこなので、はっきりしたことはいえないが、親株を選ぶときに言葉では表現できない直感のようなものがある。きっと育種をする人それぞれの好みや方向が、言葉にできないけれどあって、本能的にそうしているのだろう。同じ親株からはじめても、次代の親株を選定する人が変わったり、同じ人でも気分が変わったりすると、そのグループの個体表現が変わってきたりする。たぶん、これでは厳密には固定したとはいえないかもしれない。

流通している種苗会社の品種は形も色もわかりやすいものが多い。なんらかの明確な目標が設定され、それに合致するよう多数の人たちの作業によって作り出された製品としての品種といえいいのだろうか。言い換えれば、育種の過程であられるさまざまな変異を丹念に除去することで、品種として確立したということ。品種改良を目指す育種とは、捨てること、目的に合致しないものを排除することなのだろう。

それに対して、アマチュアの育種は、最初に確たる目標や目的があるわけではない。むしろ、植物が見せてくれるさまざまな変異を拾い上げるところからはじまる。そう、アマチュアの本領は拾うことにある。植物自身が秘め、ときおり見せてくれる変異の表現から、自分自身が面白いと思うものを選択することなのだ。しかし、育てた苗のなかからどれかを拾うということは、同時に、それ以外を捨てるということでもある。それがアマチュアにはつらい。

個体の変異をたくさん見て、そのなかから親株を選ぶには、かなりたくさ



んの個体を育てる必要があり、そのためには物理的・体力的にボリュームのある仕事をこなさなくてはならない。しかもビオラの相手だけをしているわけにはいかないので、日常生活に支障がないように。アマチュアにとっては「大量」の苗のなかから、次世代への希望を託して、管理できる範囲の親株を選ばなくてはならない。と同時に、選べないたくさんの個体をいわば見捨てなければならないのである。たぶんこれが、アマチュア育種家にとっての最大の苦しみとなる。

そのことを毎年、思い知らされ、物理的な負担を減らすために今年こそ選ぶ親株を減らそう、播種するタネを減らそうと思いつつ、結局は、つつい増やしてしまい自分の首を絞めることになる。そんなことを何年も懲りずに繰り返している。このように、育種とは苦しみをともなうもののなのに、それでもやめられないのはどうしてなのだろう？

### **植物に振りまわされて、元気をもらう——だから育種はやめられない**

苦勞して選び、タネを採って播き、パンジー・ビオラであれば、その年の秋には自分だけのオリジナル品種が花を咲かせる。しかも、それがそれまでの市販品にはなかった素敵な自分好みの色で、寄せ植えしても周りとしっくりなじむ表情のあるプロポーションで、しかも栽培地の気候にあった丈夫な植物だったら……やっぱり、やめられないかも。

種苗会社が販売するタネを、絵袋のとおりの花を期待して播き、育てる。それも十分に楽しい園芸の世界だが、自分好みの品種を育てるというのは、植物とのつきあいという意味で、またべつの味わいがあるように思う。親株の選定にさいして、もちろんわたしの好みや表現したい方向みたいなものもあるのだが、それとは無関係に、植物の意志というか生命力みたいなものを感じることもある。

あらわれる形質は、たとえ劣性のものであっても、その種が地球上の生命体としての長い歴史のなかで獲得したバリエーション（変異）のひとつだろう。種の繁栄が、後の世代にわたってバリエーションを維持しつつ個体数を増やすことならば、園芸植物たちは花好きの人間を利用して、その目的を達成しようとしているのではないのだろうか。

小さな苗を育て、鉢上げして肥料をあたえ、その生長を注意深く見守って親株を選ぶ。丁寧に交配し、タネを採り、それを分散配布する……なにかに似ている気がする。なんだか女王蜂を育てる働き蜂のような。わたしは植物のお世話係？ ひょっとして、植物たちに上手く利用されているのだろうか。いや、そうではなく、植物と人間との共生と言えるかもしれない。というよりむしろそう思いたい。

植物を育て、その意志を感じ、美しく健康な植物に育ちあがるお手伝いをする。人間の側から見れば、花の美しさはこころを癒し、育てる喜びは自身の生命力を高めてくれる。これは人間と植物との理想の関係、あるいは永年のお約束といってもいいのではないだろうか。

こんな素敵なことを種苗会社だけに任せるのではなく、個人の楽しみとしては始めることを、多くの人にお勧めしたい。自分のオリジナルができればそれを誰かに見せたいくなるし(これをわたしは「花自慢」と呼んでいる)、そこからまた人のつながりも生まれてくる。そしてなにより、オリジナル品種は大量生産商品ではなく、「手作り地産の健康植物」なのだから。